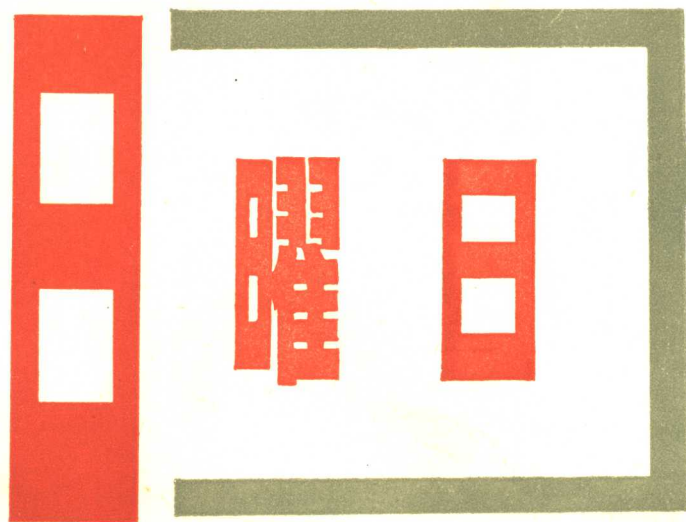


中央电视台电视教育节目用书



のたのしい

日本語

星期日日语

1984

369.4

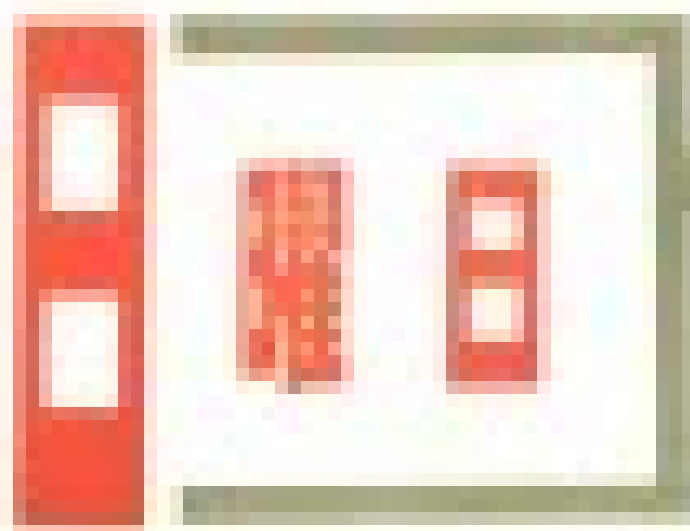
0/5

中央电视台电视教育部编

广播出版社出版



中国語訳読 中国語訳読 中国語訳読



のたのしい

日本語

星期日語

1984



H369.4

200
5

中央电视台电视教育节目用书

星期日日语

日曜日のたのしい日本語

1984—1（总5）

中央电视台电视教育部编

广播出版社

星期日日语84—1

〈总第5期〉

中央电视台电教部编

广播出版社出版

外文印刷厂印刷

新华书店北京发行所发行

1984年6月第1版 1984年6月第1次印刷

787×1092毫米 16开 印张3 字数68千字 印数 1—26,500

统一书号: 9236·029 定价: 0.38元

目 录

1. 風立ちぬ (风雪黄昏) (1)
2. 日本のゆり (日本的百合花) (26)
3. 北九州賛歌 (北九州賛歌) (32)
4. ふるさとの散歩道 (故乡漫步) (36)
5. 名古屋 (名古屋) (39)

《星期日日语》每星期日下午三时由中央电视台第一套节目向全国播送。

風 立 ち ぬ

〔軽井沢〕にある水沢家の別荘

花子：ただいま。

志乃：ああ、お帰り、どうだった？

花子：うん、蕨²と樅木の芽³摘んで来たんだけど、旦那様がお帰りになるのにこんなものでいいのかね。

志乃：ご時勢⁴だもの。

花子：うん。

志乃：羊のお肉が手に入っただけでもめっけ物⁵と思わなくちゃ。

花子：お嬢様は？

志乃：駅までお迎えに、旦那様を。

〔軽井沢の町〕

達郎：節子さん。

節子：あら、こんにちわ。

達郎：やあ、お帰りになったでしょう、お父さん。

節子：駅まで迎えに行くところなの。

達郎：あれ、じゃ、入れ違い⁶かな、ぼく、駅でお会いしましたよ。

節子：まあ、ひどい。四時五十二分に着くっていったのに。

達郎：ひと汽車早く乗られた⁷んだそうです。大浦さんたちももう一緒にお宅についていますよ。

節子：結城さんは？

達郎：ぼくはちょっと古本屋に寄って。ほら、やっと見付けましたよ。

節子：あ、また詩集？

達郎：好きなんですよ、こまった奴ですよ、この非常時に。

節子：でも、よかったわ、お会いして。そうでなければ駅でまた待ちぼうけ⁸よ、ひどいお父さん。

達郎：どうぞお先きに。ぼくは歩いて行きますから。

節子：お乗りになる？ 後に。

達郎：そうですか。じゃ、ぼくが漕ぎますよ。

節子：そう？ わるいわね。

（ナレーション）昭和十七年、太平洋戦争が始まって半年、日本はほとんど世界中の国々を相手にして戦っていた、暗く、そして重い時代が始まろうとしていた。しかし、ぼくらにはまだ確実に青春と呼べるものがあつた。

（別荘の前）

大浦： くら！ 君たちはこの戦時下をなんと心得とる⁹？ うん？ 男女七才にして席を同じうせず¹⁰と言うのに、若き男女がしかも肉体と肉体を接触しているだなあ……。

達郎： お、あ。

節子： ごめんなさい。

達郎： あ、イタ……。

大浦： お、お、何てこと、あっ……

皆： ハッハッ……

（部屋の中）

（ナレーション）その弾ける¹¹ような青春が、ここ水沢家では格別にまた自由であった。ぼくらは何かと口実をつけ¹²ては、この別荘に押し掛けた¹³。それは主として食べ物に絡んでいた¹⁴のだが、水沢さんのひとり娘、節子さんに何の関心もなかったと言え、それは嘘になる。元ヨーロッパ在勤の外交官であったという水沢さんは、ぼくらを集めて飯を食うことが、当時唯一の息抜きであったのかもしれない。

水沢： それじゃ、乾杯。

皆： 乾杯。

水沢： 志乃さん。

志乃： はい。

水沢： 書斎にゴードン¹⁵のジン（G—N）¹⁶があるんだ。持ってきてくれないかね。

志乃： はいはい。

中山： ヘエ？ ジンがあるんですか。豪勢¹⁷ですね。

水沢： いやいや、取って置き¹⁸の一本だよ。葡萄液¹⁹だけじゃ寂しいだろう。

皆： ハハ……

志乃： 済みませんですね、気が利きませんで。

達郎： よかったですね、大浦さん、アルコール²⁰があって。

大浦： うん？ ハハ……。

水沢： 何に、何かいいことでもあるの？

中山： いや、大浦さんは卒業と同時に入営²¹なんですよ。もしかすると、ここへ伺うのもこれが最後。

大浦： おいおい。

節子： あら、だって卒業は来年の三月でしょう？ お別れだなんて、まだ早いわ。

中山： それはですね、半年繰り上げになって²²、この九月になったんです。

杉： 要するに早く卒業して早く戦争に行けっていうことですね。

水沢： しかし、大学にいる間は徴兵猶予²³はあるんだろう？

大浦： あ、それ俺もう二十六なんですよ。

水沢： あ、そう。

大浦： 高等学校へ入る前に二年浪人²⁴して、それから入ってからまた裏、表やった²⁵んですよ。だからこれ以上徴兵猶予もくそもないんです。

水沢： あっはっは。

花子：裏、表ってなんですか。

中山：表三年、裏三年、合わせて六年学校にいたっちゃうわけだ、大浦さんは。

花子：あんれ、まあ、そんなに沢山落第したんですか、大浦さん。

皆：ハハ……

大浦：参った²⁶な、花子さんにだけは知られたくなかったなァ。

皆：ハハ……

水沢：あ、どうもありがとう。とにかくお互い健康であらう。

水沢：節子。

節子：はい。

水沢：こっち。

中山：いやいや、どうも。

花子：あれ？ 旦那様、これ、どなたですか。

水沢：あ、節子のお見合い²⁷の相手だよ。

花子：え？

水沢：いや、小森の叔母さんが持ってきたんだよ。見るぐらいならいいだろう。

節子：いやだわ、私お見合いなんて絶対しないから。

大浦：そうですね、節子さんとお見合いできる幸運な男がどんな顔しとるか。

節子：大浦さん、やめて、大浦さん……ねえ、返してねえ、中山さん。

達郎：よせよ、みんな。

節子：私まだ女学生よ、ねえ、結城さん。本当にお父さんったら、せっかち²⁸なんだから。

(学校)

中山：おい、結城。昨日軽井沢で買ったバレリ²⁹の詩集、どうした？ 水沢家に忘れてきただろう。節子さんが届けてくれた。

達郎：そうか、悪いことしたな。

中山：このごろどうかしているぞ。

達郎：本は？

中山：ばか野郎、おれが受け取っちゃったら、恨まれるじゃないか。

達郎：待ってるのか。

中山：裏門だ。おいおい、目立たないようにうまくやれよ。

(学校の外)

節子：じゃ、十月にはもう東京？

達郎：合格すればね。

節子：大丈夫、受かるわよ。

達郎：は、どうかだ。

節子：大浦さんは兵隊さんになってしまうし、寂しくなるわね、軽井沢。

達郎：ぼくは家がこっちだから、また帰ってきますよ。

節子：その時はお寄りになってくださる？

達郎：もちろん伺わせていただきます。

節子：本当？

達郎：本当ですよ、指切り³⁰したっていいですよ。

節子：まあ、

達郎：ハッハッハ……。

（結城家）

母：あら、お帰りなさい。

達郎：どこ行くの、お母さん。

母：急に兄さんが帰えて見えてね、公用なんですよ。

達郎：へえ？じゃ、また夜は酒盛り³¹かな。

母：仕度がちょっと遅れるけど我慢してね。

結成：参った。はは、慎次郎の大上段³²にはとてもかなわん。

慎次郎：いやいや、さすがにお父さんです。油断をしていたら打ち込まれるところでした。達郎、今度はお前がこい。

達郎：はい。

慎次郎：だれだ、あの人は？一緒に歩いていた女学生。そんなことをしてるから腕が鈍る³³んだ、なんださっきのざまは。

（水沢家別荘）

花子：いいんですか、行かなくて。

節子：いいわよ、勝手に連れてきたんですもの、叔母さまが。

花子：でも、でもお見合いなんでしょう。

節子：いやよ、私絶対にいやだわ。

叔母：節子さん何してるの、早く洋介さんにごあいさつしなくては失礼じゃない。

節子：私まだ結婚する気なんかありませんから。

叔母：なににも今すぐになんて行ってやしないわよ。ただお約束だけでもしとけば安心でしょう？なにしろ洋介さんは小川大作の甥御さん³⁴だし、ゆくゆくはお父様の経営していらっしゃる会社をお継ぎになるんですもの。こんないいお話しはないわよ。

洋介：どうかなさったんですか。

叔母：あら、まあ、ごめんあそばせ³⁵、ほったらかしにして³⁶。姪の節子でございます。あちらが小川洋介様。

洋介：初めまして。

叔母：何しろ母親が早くに亡くなって、父親一人の手で育ったものですから、もうもう行儀知らず³⁷です、ホホホ……。節子さん、洋介様をご案内してテニスコートのあたりまで散歩したらどう？

洋介：いいですね、ぼくもしばらく軽井沢にご無沙汰してたから、その辺でもひとまわりしましょうか。

叔母：さあ、節子さん、いってらっしゃい。

節子：花子さん、一緒にきて。

花子：え？！

（テニスコートのあたり）

中山：あれ？大浦。

大浦：あ。

中山：節子さんじゃないか？

大浦：なるほどね。

中山：おいおい、あいつが問題の見合いの相手だろう。

杉：しかし、きざ³⁸な野郎だなあ。

大浦：なんか写真よりすこしましたぞ、なあ。

中山：おいおい、黙って見てるのか。

達郎：仕方がないだろう。

大浦：え、まあまあまあ、義を見てせざるは勇無きなり³⁹と。ちょっと顔借してくれ。いかこういうのはどうだ。

洋介：テニスはなさるんですか。

節子：いいえ、あんな上品振った⁴⁰スポーツ、きらいです。

洋介：おお、それじゃご趣味は？

節子：声を張り上げて歌う⁴¹ことです。

洋介：ああ、音楽がお好きですか。

節子：一番好きなのは逆立ち⁴²です。

花子：フッフ……。

大浦：おーい、あなた第一高女の生徒ですね。

節子：え。

大浦：大変です、学校が、学校が火事です。

節子：火事？！

大浦：そう、ぼくたちは手分けして、生徒を全員に知らせるために走り回っているんです。さあ緊急登校です、さあ早く。

節子：はい。

花子：私も行きます。

大浦：は、君なんかの足しになる⁴³だろう、さ、さ、さ。

節子：失礼します。

花子：失礼します。

大浦：失礼します。

節子：あ、面白かった。きっとこの縁談⁴⁴こわれると思うわ。

皆：はは……。

花子：大浦さん、大真面目な顔して……。

皆：はは……。

大浦：こら、このおれは節子さんを助けようとしたのに、馬鹿にしすぎるぞ、君は。待て！

(水沢家の別荘)

叔母：兄さんも兄さんですよ。おかげで私小川様のお宅に顔向けできなくなりました⁴⁵わ。

水沢： はは、いやいや悪かった、悪かった。けれど、お前もいけないんだよ、いきなり本人を連れてきたりするから、節子は驚くんだよ。

叔母： なに言ってるんですか。お写真を渡した時、兄さんこっちにいらっしゃる間に一度お連れするからって念を押しておいた⁴⁶じゃありませんか。第一あんな高等学校の生徒を嫁入前の娘のいるうちに出入りさせるなんて、非常識⁴⁷ですよ。

水沢： 節子はまだ女学生だよ。

叔母： だからなおさら厳しくしなきゃ。節ちゃんは体が弱いから、こっちの女学校に通わせているんで、遊びにきているわけじゃないんですよ。

志乃： 粗茶ですが。

叔母： 何しているの、節ちゃん。

志乃： え、今お見えんになります。

叔母： 兄さんがこんなだから、志乃さん あなたがちゃんと節子をしつけ⁴⁸くださるなきゃだめじゃない。

志乃： はい。

叔母： 男親って本当に甘くてだめね。兄さん、この人どうかしら、高木子爵の息子さん、航空計器のエンジニア⁴⁹だから兵隊に取られることもないし、節ちゃんには打って付け⁵⁰だと思うんだけど。

節子： 怒ってる？ 叔母様。

志乃： そりゃもう、大変なもんですよ。

節子： 頭から湯気が出てた⁵¹？

志乃： えーえ。

節子： あ、はは、面白い。

志乃： お待ちかねですよ、早く行ってさしあげないとお父様お困りのようですよ。

節子： いや。

花子： お嬢様、結城さんが見えましたけど。

節子： 結城さんが？

花子： お客様がいらっしてるのならって、門の外でお待ちです。

節子： 本当？

志乃： お嬢さん。

節子： お使いに行ったらかなんとかうまいこと言っておいて。おねがい。

志乃： おお、困りましたね。

花子： 結城さん、東京の大学に行くんで、ご挨拶に見えたんだって。

志乃： そう、お嬢さんさみしくなるわね。

(軽井沢の町)

達郎： この間のいたずらでお父さんに叱られたでしょう。

節子： 父は笑ってたけど、叔母様は今日もきてたのよ。

達郎： いいんですか、出て来たりして。

節子： いいんです。それよりお礼言わなくっちゃ。おかげさまで、あの縁談きれいさっぱりこわれました⁵²。ありがとうございました。ウフフ……。あのまたこんな事があ

ったらこわしていただけます？。

達郎：しかし、大浦さんが入隊してしまったら、あんなにうまくいくかどうか。

節子：私、結城さんにこわしていただきたいんです。

達郎：ぼくでよかったら、何度でも。

(駅で)

達郎：大浦さん。

大浦：おお。

達郎：やあ、すっかり兵隊ですね。

大浦：や、こうして見るといいもんだね、大学っていうのも。おれもっと勉強すべきだったのかも知れんなあ。

二人：はは……。

大浦：なんだその本、ヘッセ⁵³か。さすがのおれも最近活字に飢えてきた⁵⁴。

達郎：杉たちが鳥鍋屋⁵⁵席を確保して待っている。

大浦：鳥鍋か、なつかしいなあ。

(鳥鍋屋)

杉：いくら勉強したってむださ、どっちみちおれたちは戦争に行かなきゃならん。行けば生きて帰れる確率は何パーセントもないんだからな。

中山：しかし、この国がそれで救われるなら、それもまたいいじゃないか。

大浦：ただ死ねばいいなら、そうむずかしいことじゃないさ。だが、戦争は相手を殺さなきゃならん。個人的にはなんの恨みもない相手を、ただ敵ということだけで、そんなに簡単に殺せるもんだろうか。

中山：殺さなきゃ、こっちが殺される。死にたくなきゃ殺さなきゃならん、正当防衛だよ。

達郎：おれはしかし、大浦さんの気持が分るような気がするな。向うだって両親や愛する人と別れて戦場へ出て来るんだ。心情的にはおれたちと何ら変わるところはないんだからね。

中山：じゃ、お前たちはこの戦争を間違いだとでもいうのか。

杉：よせよせ、せっかく大浦さんが戻ってきたんだ。おれたちはいいさ、まだ三年は徴兵猶予が残っている。しかし、大浦さんはいつ戦場に駆出されるか分らないんだぞ。

大浦：そうだな、こうして四人で会って飲めるのも、あと何回あるか。

達郎：大浦さん。

(東京の水沢家)

水沢：おう、びっくりするじゃないか、急に帰ってきたりして。学校どうした。

節子：休んできたの。

水沢：うん？ この間も寝込んだときいたから、心配していたんだよ。新しい縁談の事かね。

節子：そう。

水沢：お受けするのか。

節子：お断りに来たの。

水沢：どうして。

節子：まだ早すぎるし、第一、あの方、好きになれないから。

水沢：はは、なかなかいい青年だと思ったんだがね、お父さん。

節子：もうお会いになったの、お父さん。

水沢：いや、今は男と女が自由に付き合えるような時代じゃないだろう。それだけに女性が男性を選べる機会はきわめて少くない。お父さんはね、節子が婚期を失うことを心配しているだけなんだよ。どうだろうね、せっかく一度会うだけでもあって見たら。

節子：いや、絶対にいやよ。私自分のことは自分で決めます。

水沢：いや、節子、節子。

(東京の町)

達郎：や、しばらく。

節子：突然、お電話したりしてごめんなさい。

達郎：そんなこと、いいですよ。それより、いったいどうしたんです？

節子：父に相談があったの。

達郎：どんな？ どうしたんですよ、黙ってたんじゃない。

節子：またこわしてほしいんです。

達郎：こわす、何をですか、また縁談ですか。

節子：え、いやでいやで仕方がないのに、今度は父まで乗り気⁵⁶なの。どうしたらいいの、あたし。

達郎：あした、君のお父さんにお目にかかるよ。

(結城家)

慎次郎：達郎か。

達郎：はい。

慎次郎：ちょっとこい、話がある。どこへ行っていた

達郎：上野⁵⁷です。

慎次郎：そんなに遅くまでか。

達郎：人を送ってきました。

慎次郎：だれを、女性か。

達郎：え。

慎次郎：その女性とはどういう付き合い方をしてるんだ？

達郎：兄さん、ぼくは結婚しようと思っています。もちろん大学を出てからです。しかし、お許しをいただければ、今すぐにでも婚約したいと考えています。軽井沢でお世話になった人のお嬢さんです。お父さんは外務省に勤められている。

慎次郎：そんな事を聞かなくてもいい。

達郎：いいえ、聞いていただきたいんです。もっと早く兄さんに話すべきでした。しかし、ぼくの気持だけが先行して⁵⁸いて、言わば片思い⁵⁹にすぎないと思っていたもんですから。

慎次郎：お互いの気持を確認し合ったというのか。

達郎：え。

慎次郎： どうか。おれは反対だ。平和な時代ならおれはお前の結婚に反対したりはしない。弟の幸せを喜ばん兄はおらんからな。しかし、今は戦争のさなかだ。いずれお前も戦場へ向う。戦場へ行けば死が待っている。お前がそのお嬢さんを好きになるのは仕方がないことだ、そこまでおれは、とやかくは言わん。だがほぼ確実に近い将来、死ぬであろう男が結婚を約束してもそれがいったい何になる。お前がその人を愛しているのならなおさらの事だ。今は女性を幸せにできるような時代ではない。だったら潔く⁶⁰独りで死地へ向かえ、それが男だ。おれの言いたい事はそれだけだ。

(ベルの音)

達郎： どなたですか。

中山： おれだ、中山だ。

達郎： どうしたんだ、こんな時間に。

中山： 大浦さんが戦死した。

達郎： 大浦さんが?!

中山： 詳しいことはまだ分らんが、軽井沢の大浦さんの家から連絡があって、告別式にはぜひ俺たちに参列してほしいとってきただ。

(外務省)

水沢： おお。

達郎： お忙しいところ突然おじゃまして申し訳ありません。

水沢： いやいや、ここに籍があるというだけでね、わたしのような外交官は今の世の中では浪人見たいなもんだ。はは……まあ、かけないか。

達郎： 失礼します。

水沢： で、何? 話って。

達郎： 大浦さんが戦死しました。

水沢： 大浦君が?!

達郎： はい、南方に向う途中乗っていた船が沈んで……。

水沢： そう、ひょうきん⁶¹な実にはいい青年だったのにね。

達郎： 相手を殺すような破目に陥いらずに死んでいけたのが、彼にとってはせめてもの幸いだったような気がします。

(ノックの音)

水沢： はい。

達郎： 実は、今日お宅に伺うつもりでした。

水沢： お、なに。

達郎： 正直に申し上げますと、昨日節子さんにお会いして、それでぼくが今日節子さんとの結婚を許していただきに上がることになっていたんです。しかし、大浦さんの戦死はやがてぼくの運命でもあるような気がします。死ぬことが分っていて、結婚の約束をするのはみすみす⁶²節子さんを不幸せにするだけです。ですから、ぼくはこの話はもう……。

水沢： 達郎君。

達郎： はい。

水沢： 残念ながらこの戦争は負けるよ。死んではいけない。お互いになんと生かき延びることを考えよう。

達郎： ぼくもそう願いたいと思います。しかし、そんな保証はどこにもありません。水沢さんから節子さんによろしくお伝え下さい。失礼します。

(結城家)

慎次郎の部下： お帰りなさい。

達郎： ただいま。

部下： 水沢さんという女性から何回も電話が入っておりますが。

達郎： 今度かかったら、信州⁶³へ帰ったと言って下さい。

部下： 分かりました。

(水沢家)

節子： え、信州へお帰りになった？何かおありになったんでしょうか。もしもし、もしもし、そうですか、失礼しました。

春子： あら、まあ、お嬢様、ストーブ⁶⁴もつけずにこんな冷たいお部屋に。毒ですよ、お体に。

(ノックの音)

節子： なんだ、お父さんか。

水沢： あ、ただいま。

節子： お帰りなさい。

春子： お帰りなさいませ。

水沢： 達郎君を待っていたのか。

節子： どうしてお父さんが知ってるの。お父さん。

水沢： 今日役所に達郎君が見えたよ。

節子： まさか、お父さん、どうして彼はこないの。

水沢： 大浦君が戦死したよ。

節子： 大浦さんが？！

水沢： それで達郎君は家へ来るのをやめたんだ。

節子： どうして。

水沢： 自分もやがては戦争に行く。行けばおそらく生きて帰えることはないだろう。そんな男が結婚の約束をしても、お前を幸せにすることはできないと言うんだ。彼は立派な男だ。分ってやるんだね、彼の気持を。

節子： いや、私はいやです。あの人はまだ生きてるわ。生きているかぎり幸せになる権利はあるはずよ。私はあの人が好きなんです。

水沢： 男には責任がある。

節子： 責任だなんてそんな。あの人の未来にかぎりがあるなら、なおさら私はあの人のそばにいて上げたい。生きている間はたとえ二年でも三年でも。

水沢： 節子、大丈夫か、早くお休み。節子、節子。春さん、春さん、春さん、医者を呼んでくれ！春さん。

(病院)

医者：これが病巣⁶⁵だ。左の肺がほとんど冒されている。うん、どうしてこんなになるまで放っておいたんだ。

水沢：あ、そんなに悪いのか。軽井沢の医者も東京の医者も結核だなんて一言も言わなかったぞ。

医者：症状が緩やかで、菌の増殖が早いというのが若い人のテーベ⁶⁶の特徴なんだ、レントゲン⁶⁷でとって見ればすぐ分る。どうしてもっと早くおれの所に連れて来なかったんだい。

水沢：不覚⁶⁸だった。な、なんとかならんだろうか。

医者：うん、富士見高原⁶⁹におれのやっている療養所がある。そこへいって見るか。

水沢：どこにあるんだ富士見高原って。

医者：ハケ岳の麓だ⁷⁰。

水沢：なおるもんだったら、是非頼む。

医者：いやなおるっていう約束はできんが。まあ、今の日本じゃ最高の療養所だ。町の中においておくよりよっぽどええ。

水沢：頼む、なんとしてもなおしてやりたい。

医者：うん。

(ナレーション) 抗生物質のない当時、結核は不治の病として忌み嫌われていた⁷¹。水沢さんは即刻富士見高原の療養所に入院するように説得したのだが、節子さんは頑として聞かなかったそうだ。悪いことにはそれをぼくはまったく知らなかった。知らないどころか、節子さんへの愛を断念したぼく自身、その反動のように極めて絶望的なニヒルな生活⁷²に落ちこみつつあった⁷³。

(酒屋)

杉：おい、酒だ、酒持ってこい。

女中：ありませんよ。お酒どころかなおしだって一人三杯だけなんですから。

達郎：おれのを飲めよ。

中山：なんだ、やっぱりここかあ、今晚は。おい、いい物持ってきたぞ、ほら。

杉：お、酒じゃないか。

達郎：どうしたんだ。

中山：どうしたと思う、くれたんだよ、お前の兄貴が。

達郎：兄貴が？

中山：おお、お前の家にいったらな、どうせまたどって飲んでるだろうから持っていってやってくれって、いいところがあるよ。おい。

杉：あ。

中山：コップ取ってくれよ。

杉：あ。くどい⁷⁴ようだけど、お前が節子さんとは本当に何もなかったのか。

達郎：何度言ったら分るんだよ、おれはふそんな男じゃない。

中山：ならば、今夜は結城の筆下し⁷⁵といか、女も知らずに死んで行くことはないだろう。

杉：死ぬ、死ぬ、死ぬかあ、おれはもうそんなことばは聞きあきた⁷⁶。

中山：しかし、大浦さんはすでに死んだんだ。アツツ島は玉砕し⁷⁷た⁷⁸し、戦司は日に日に激しい。おれたちが死を以って立ち上がらなかったら、誰がこの日本を救うんだ。

杉：死んで日本が救えるなら、お前一人で死ぬんだな、救えやしないよ。

中山：杉、もう一度言ってみろ。お前は多分ヒューマニスティックで文化的⁷⁹なそういう自分をひけらかして⁸⁰言っているんだろうから。それはな、ただ軟弱でエゴイステック⁸¹なんだ。

杉：エゴイステックで軟弱でなにが悪い？ 人間は皆エゴイストだ。

達郎：やめれ、そういうこと。誰が好きこのんで戦争なんか行きたいもんか。俺だって正直言って戦争なんか行きたくはない。本当の人間の戦いはそんな所にはないんだ。

（東京）

水沢：達郎君じゃないか。

達郎：水沢さん。

水沢：どう、元気？

達郎：はい。

水沢：今、軽井沢から帰ってきたところなんだ。どうだい、コーヒーでも飲みこないか。

達郎：はい。

（水沢家）

春子：どうぞ、ごゆっくり。

達郎：はい、どうもありがとうございます。

水沢：さ、さ、どうぞ、どうぞ。軽井沢の葡萄液も砂糖がなくなってね、酸っぱいだけになってしまった。はは……。

達郎：節子さんはお元気ですか。

水沢：うん、胸をちょっと患って⁸²ね。

達郎：節子さんが？ お悪いんですか。

水沢：今年の冬が越せるかどうか⁸³。

達郎：そんなに？

水沢：もっと早く気が付いてやるべきだった。達郎君、君は君の未来が見えないからという理由で節子の事を断念してくれた。その時私は君の好意にあまえた⁸⁴。ところが今度はそのかんじん⁸⁵の節子の未来が見えなくなりそうになっている。皮肉なもんだね⁸⁶。

達郎：水沢さん。

水沢：うん？

達郎：お願いがあります。

水沢：や、なんだね。

達郎：もうぼくに節子さんを下さいとは言いません。ただ節子さんのそばに居させて下さい。ぼくが戦地に行くまで。

水沢：達郎君、結核という奴は感染する病気だよ。若い君まで巻き添え⁸⁷にするわけにはいかん。